

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720360

研究課題名(和文) 土器の型式変化と分布に関する民族考古学的研究

研究課題名(英文) Ethno-archaeological study about typical change and distribution of pottery

研究代表者

中門 亮太 (NAKAKADO, Ryota)

早稲田大学・付置研究所・助手

研究者番号：60612033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、パプアニューギニアにおける土器づくり民族誌調査を通して、土器型式の時期的変化・地理的分布を齎す社会的背景を探ることを目的とした。土器型式の変化においては、親族組織を通じたヒト・技術の移動が大きな影響を及ぼす。地理的分布に関しては、親族組織のつながりや製作技法に差異によって、各地域で在地の型式が成立し、分布圏を持つことが窺える。一方で、型式を超えて存在する儀礼形態が、異系統土器の共存を齎すことが想定される。これらの知見は、縄文土器型式においては、粗製土器や精製土器、特殊遺物などの広がり方と比較しうる。民族考古学的視点から、その背景には親族組織や儀礼形態の存在を垣間みることができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the social context which work chronological change and geographic distribution about pottery type through the ethnographic research about pottery making in Papua New Guinea. In the change of pottery, the transference of people and diffusion of technique have a great influence. In the geographic distribution, we can interpret that the local pottery types are originated from network of kinship and difference of techniques of pottery making, then they have own indigenous distribution. On the other hand, there is special ritual form which pass across the several areas of pottery types. Such ritual causes coexistence of several pottery types. In the light of Jomon pottery, we can compare with the distribution of coarse pottery, fine pottery, and special clay ornaments. From the ethno-archaeological viewpoint, we can interpret the kinship system and ritual form as context of such distribution.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：民族考古学 土器型式 土器づくり民族誌 パプアニューギニア 縄文土器

### 1. 研究開始当初の背景

縄文土器研究は、無文字社会における時間の物差しとしての編年研究に重点が置かれてきた経緯があり、現在では全国的に精緻な編年網ができつつある。編年研究の成果により、縄文土器が時期・地域によって様々な型式を持つことが明らかとなった。しかし、土器型式の時期的・地理的差異は、発掘調査によって事実として確認できるものの、その背景にある社会的な事象を、遺物のみから探ることは困難である。そのため、土器型式が「なぜ変化するのか」、「なぜ地理的な分布を示すのか」といった、土器型式が持つ社会的な側面については、いくつかの仮説が提示されたものの、いまだ謎のままである。

縄文土器は、縄文時代を通じて日本列島に普く分布しており、出土量も最も豊富な遺物である。そのため、縄文土器を従来の編年研究の枠組みにとどまらず、それらが製作・使用された当時の社会を読み解く物質文化として捉えることができれば、縄文社会を探る上で非常に重要な遺物となる。そこで、本研究では、民族考古学的手法を用いることで、土器型式の変化・分布を齎す社会的背景を探ることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究ではまず、現在でも家庭的な土器づくりの伝統が残るパプアニューギニア・ミルンベイ州において土器づくり民族誌に関する調査を行い、実際に製作され流通している土器を、考古学的民族誌の視点から捉えることで、土器型式が持つ社会的意味を探ることを目的とした。各世帯が保有する土器のデータを収集し、所有者や製作者への聞き取り調査で得られた知見を加味することで、土器に現れる変化や実際の流通・分布のあり方について、社会的な枠組みの中で土器を理解することを目的とした。また、現在の土器づくり民族誌は、伝統的な側面を残しているとはいえ、貨幣経済やキリスト教の影響を少なからず受けているため、過去の民族誌記録や国内にある当該地域の民族資料についても併せて調査を行った。それら土器づくり民族誌に関する成果をまとめ、土器型式の変化・流通・分布の背景にある様々な事象についてのモデルを作成した。

一方で、代表者がこれまで研究を続けてきた東北地方における縄文時代後期後葉の土器型式である瘤付土器の編年を整理し、遺物として残された土器が示す事実としての変化や、地理的分布のあり方を追求した。各地域における編年をもとに、文様要素や文様描出技法を手がかりに、瘤付土器の変化や流通のあり方を追うことを目的とした。

その上で、土器づくり民族誌調査で得られた知見をもとに、縄文土器型式の変化・分布を齎す社会的背景を探ることを最終的な目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、土器が実際に製作・使用され、「生きている」社会の中で、どのように変化・移動・分布し、社会の中に位置づけられているかを探るため、パプアニューギニア・ミルンベイ州マッシム地域(図1)をフィールドに、土器づくり民族誌調査を行った。

調査対象地は、代表者が2006年から継続してフィールドワークを行っている地域であり、研究開始前から本地域における土器のあり方についていくつかの知見を得ていた。特に、マッシム南部に位置するワリ島は、大規模土器生産地の一つであり、ワリ島産の土器は、半ばブランド化し広く流通していることが重要な点であった。また、ワリ島の模倣土器が存在することもデータとして得られており、ワリ島の土器が本地域における土器型式の変化と分布に多大な影響を持っていることが窺えた。そのため、本研究ではワリ島土器が在地の土器を持つ地域へどのように流通・分布するのか、在地の土器製作者や土器型式にどのような影響を及ぼすのか、という点に充填を絞り調査を行った。

主な調査内容は、土器製作の実見、拓本・実測図・写真など土器データの収集、土器製作者や所有者への聞き取り調査などである。また、GPSを用いて土器や製作者に関するデータ・情報に地理的情報を付加し、土器の流通や製作者の動きを追った。そして、調査成果をもとに当該地域における土器型式の変化・流通・分布のあり方をまとめ、それらを齎す社会的背景の把握につとめた。

一方で、上記成果を縄文土器研究に還元するため、代表者がこれまで研究を行ってきた東北地方の縄文時代後期後葉の土器型式である瘤付土器の研究を併せて進めた。瘤付土器の研究では、まず東北地方における時間軸の整理を行い、変遷過程の把握につとめた。その後、瘤付土器に残された文様や文様描出技法をもとに、東北地方をいくつかの地域に分け、それら地域差や文様モチーフや技法の流通・展開過程を探った。以上から浮かび上がった、瘤付土器が示す型式変化や分布に係る考古学的事実と、土器づくり民族誌例で得られたモデルとの比較検討を行い、土器型式の背後にある社会の様相を捉えることを目指した。

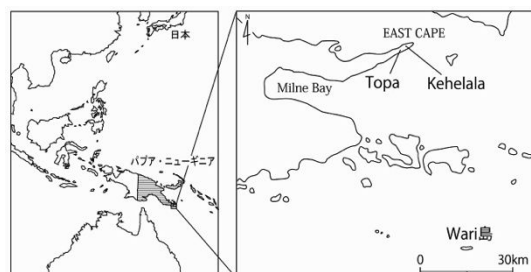


図1 調査地の位置

#### 4. 研究成果

##### (1) 土器づくり民族誌調査における成果 土器型式の変化

土器型式の変化は、ある時点を境に急に変わるものではなく、漸次的に緩やかな変化をする。そのため、2年間の本研究では、明確な型式変化の場面を捉えることはできなかったが、イーストケープにおいて、型式変化の契機となりうる事象について確認することができた。

イーストケープの在地土器型式に変化を齎すと考えられるものは、マッシム地域における大規模土器生産地であるワリ島土器の模倣土器の存在である(図2)。ワリ島の土器は薄手で大型であることから、多くの調理を手早く行えるということから人気が高く、半ばブランド化している。イーストケープは在地の土器を持つにもかかわらず、ワリ島の模倣土器が多数搬入されており、ワリ島の模倣土器も製作されている。イーストケープとワリ島では粘土の素地づくりにまで遡る製作技法の差が存在する。そのため、器形も含めワリ島の土器と遜色ない模倣土器を製作できる者は、イーストケープ・ワリ島双方の製作技術に精通する者がほとんどであるが、高い製作技術を有する製作者は、ワリ島の土器を見ただけで、完成度の高い模倣土器を製作できることが確認された。

しかし、大型の模倣土器を製作できる製作者は、ワリ島の土器製作技法に精通している者に限られる。ワリ島の製作技法は、きめ細かい素地づくりと成形途中の乾燥に特徴がある。これらの工程は、搬入されたモノを見るだけでは把握することができない。また、双方の製作技術を有しながらも、イーストケープの土器を主体的に製作する製作者は、ワリ島の大型土器は製作できないと言っていた。本地域における土器の価値は大きさによって決まる。そのため、特に大型のものはワリ島土器としての真の価値を有するものと捉えられ、そのためにブランド化して流通している。模倣土器を製作する製作者は、ワリ島の土器が好まれる事実がありながら、製作技法の違いから真に求められる大型の模倣土器は製作できない。

一方で、在地の土器で大型のものに、ワリ島土器に特徴的な文様を描くことが間間見られる。これは、在地の土器製作技法しか有していない製作者も行っていることであり、モノの移動のみによっても起こりうる事象と捉えられる。同様の文様は、染工研究においてマッシム南部のトゥベトゥベ島で、「大型で深い土器」に描かれる文様として記録されており、大きさによって文様が区別されていたことが窺える(M. Macintyre 1982)。模倣土器は、土器型式の変化に大きな影響を持つと考えられるが、土器型式が大きく変容するには、モノの移動のみならず、技術の移動が重要であることが指摘できる。

番号	製作技法	文様幅	口唇	文様
①	EC/Wari	中間	Wari系	Wari系
②	EC/Wari	Wari	Wari系	Wari系
③	EC/Wari	Wari寄り	EC系	Wari系
④	EC/Wari	Wari寄り	Wari系	EC系
⑤	不明	Wari寄り	Wari系	Wari系
⑥	ECのみ	EC	EC系	Wari系
⑦	ECのみ	EC	EC系	Wari系

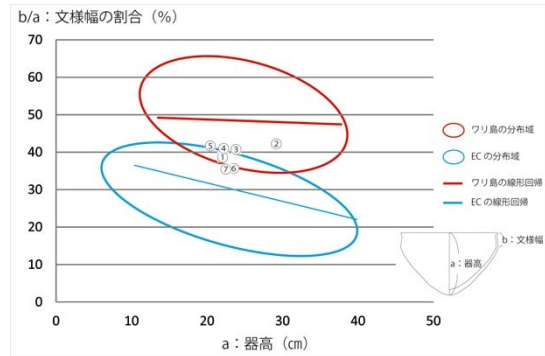


図2 イーストケープにおける模倣土器

##### 土器型式の分布

土器型式の分布については、いくつかの事象が影響して、各地域における型式が成立したり、異系統土器が共存したりする可能性を捉えることができた(図3)。

各地域における土器型式の成立は、当該地域に残る母系性に基づく親族組織および土地利用・居住制度と深く関わっている。当該地域では、母から娘へ土地が受け継がれるため、婚姻により女性が移動することは少ない。また、土器づくりは基本的に母から娘へ伝えられるため、血縁関係を通じて土器が継承される。そのため血縁集団は土器型式の最小単位の背景にあるものとして捉えることができる。

当該地域における葬送儀礼では、親族が一堂に会して共食を行う。葬送儀礼においては、親族組織は協力関係にあり、食料を持ちよる。集まった多くの人々のために調理を行うため、多くの土器が必要となる。土器は、親族の製作者が集まって製作するほか、参加者が持ち寄ったりする。儀礼後は、協力者に食料を分配したり、土器を与えたりする。本地域の蹴る葬送儀礼は、土器製作や土器の移動の契機となっている。参加者は同一の親族組織の成員であるため、特定の土器型式が親族組織を通じてある一定の分布範囲を持つことが伺える。

また、イーストケープとワリ島における土器製作の実見から、製作技法の差異が土器型式成立の背景にあることを指摘できる。両地域では、粘土紐の積み上げにより土器製作を行うが、先述の通り粘土の素地づくりや工程に差が見られる。製作技法の差は、器壁の薄さや文様を描く口縁部の幅などの違いを生むため、結果として別系統の土器型式が成立

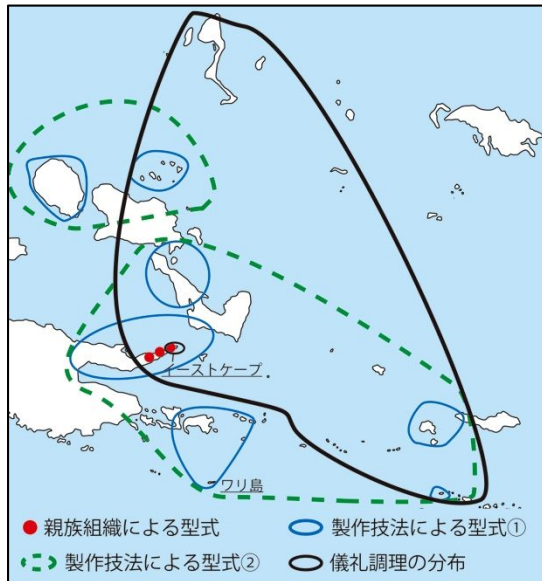


図3 マッサム地域における土器の分布をめぐらる事象

する。この製作技法の差は、モノの移動のみでは捉えることが難しいため、交易などにより他地域の土器型式が搬入されたとしても、各地域における土器型式はそれぞれ存在しうる。また、より大きな製作技法の差として、イーストケープ、フリ島が属するマッサム南部と、アムフレット諸島などが属するマッサム北部との差があげられる。マッサム北部は粘土板を貼り合わせて成形し、叩き板を用いて整形する。マッサム南部の土器づくりが輪積み技法によるものとして大きく括られる一方、マッサム北部は叩き技法による製作として括ることができる。両地域は、クラ交易網に含まれつつも、それぞれ独自の交易網を持っており、土器の流通はそれほど頻繁と言えない。

土器の分布を探る上で、上記の差を超えて影響を与える事象として、儀礼食調理があげられる。本地域には、ヤムイモやバナナ、小麦粉を団子にして、ココナッツミルクで煮込む「モナ」という儀礼食が存在する。この儀礼食調理は、長時間火にかけて煮込む必要があるため、厚手の土器が求められ、儀礼食調理のための特別機種が存在する。フリ島の土器は、薄手であることが特徴であるが、フリ島はこの儀礼食調理が存在しないため、厚手の土器は作らない。そのため、イーストケープを始め、儀礼食が存在する地域では、一般的な調理具としてフリ島の土器を用いつつも、儀礼食調理のための土器は、在地の土器でまかっている。つまり、儀礼食調理の存在は、流行や効率などとは別次元で、異系統土器の共存を齎す事象として捉えられる。

## (2) 縄文土器型式の理解

上述のように土器づくり民族誌の研究から、土器型式の変化と分布を齎す事象は、婚姻に基づく製作者の移動や、部族の分布範囲

など、これまで仮説とされてきたことを一部で証明する形となった。しかし、土器型式の背景にある社会的現象は、決して単純なものではなく、血縁組織や親族組織、製作技法(地域差)、儀礼形態など、複数の事象が絡み合っていることがわかる。

土器の変化については、他地域から異系統の土器が流入することにより、文様や器形の模倣が行われ、在地の土器型式に変化を及ぼす可能性が指摘できる。瘠付土器においては、その後半期に展開する三叉文と呼ばれる特徴的な文様から、型式変化の流れが想定される。三叉文は、仙台湾周辺地域でその成立・発展過程を詳細に追うことができるが、東北地方北部では終末期になってある程度完成した形で土器に現れる。そのため、仙台湾周辺地域が三叉文の発信地域であり、他地域へ展開していった可能性が考えられる。これは、マッサム地域の事例と比較すると、フリ島のように周辺地域において土器づくりである程度強い力を持った地域が、新たな土器情報の発信地域であることが推定される。しかし、東北地方北部や関東地方で現れる三叉文は、仙台湾周辺地域と比べ、文様内に無理矢理嵌入する様相が見られる。そのため、三叉文の展開は、モノの移動による模倣の可能性が考えられる。

そのほかに、瘠付土器後半期に文様内を刺突や刻目で充填する「刺突・刻目手法」でも見られる仙台湾周辺地域を発信地域とする様相が見られる。「刺突・刻目手法」の変遷は、文様モチーフの変遷と強く関係しており、モノの移動のみによる変化よりやや大きな変化として捉えられる(中門2014)。「刺突・刻目手法」と関係する文様モチーフの変化は、東北地方一帯で土器の斉一性が高まる流れと重なっており、ヒトの移動が盛んになることで、地域性豊かだった瘠付土器が東北地方全域で統一的な型式に収斂していった可能性が考えられる。

土器型式の分布については、土器づくり民族誌で捉えられた事象を縄文土器研究にある程度還元して考えることができる。

まず、血縁集団による土器型式の継承は、土器型式における最小の単位として捉えることができる。しかし、この差は縄文土器で捉えるにはあまりに小さく、今後の課題としたい。一方、親族組織に基づく協力関係により、土器は地理的な広がりを持つが、その差はある程度の地理的なまとまりを持って分布する。これは、瘠付土器で考えると、粗製土器の差にあたりと考えられる。瘠付土器は、磨消縄文による文様や波状口縁、瘠状突起などによる装飾を持つ精製土器と、縄文のみを施した粗製土器とが存在する。粗製土器は、日常の調理などに用いられたと考えられ、縄文の転がし方や縄の撚り方などでより細かな地域差を示すとされる。

製作技法による型式差は、瘠付土器で考えると、精製土器の地域差にあたりと考えられ

る。瘡付土器期の精製土器は、大きく北部、中部太平洋側、中部日本海側、南部の4地域に分けられる。各地域では、貼瘡の用いや形状、文様モチーフの多様性などに差異が見られる。同様の差異は、関東地方で同時期に展開した安行式などにも見られる。これら、型式内での地域差は製作技法による差に起因すると考えられる。

一方で、当該期には丹塗りの注口土器や、動物形土製品など、土器型式を超えて広く分布する遺物がある。これら資料は、日常的に使用される遺物とは考えにくく、儀礼的な側面が強い。儀礼に関わるモノが、土器型式を超えて分布の広がりを見せるということは、民族誌例でも確認されたことであり、当該期においても土器型式を超えた儀礼形態のあり方が存在したと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

中門亮太 2014「瘡付土器に見られる刺突・刻目手法に関する一考察」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第15号、p29-p39、早稲田大学會津八一記念博物館

中門亮太 2014「【シンポジウム報告】考古学と民族学」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第15号、p128-p133

高橋龍三郎、中門亮太、平原信崇 2014「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(10)」(査読有)『史観』第170冊、p98-p121、早稲田大学史学会

中門亮太 2013「【シンポジウム講演録】2011年度セピック川流域における民族考古学的調査報告-アベラム族の総合的調査-」『天理参考館報』第26号、p45-p50、天理大学附属天理参考館

中門亮太 2013「東北地方北部における瘡付土器の基礎的研究」(査読有)『古代』131号、p49-p83、早稲田大学考古学会

中門亮太 2013「アベラム族と精霊の関わり」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第14号、p47-p54、早稲田大学會津八一記念博物館

高橋龍三郎、中門亮太、岩井聖吾、平原信崇 2013「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(9)」(査読有)『史観』第168冊、p103-p120、早稲田大学史学会

〔学会発表〕(計3件)

中門亮太「民族誌・民俗誌料から見た土器の用途・分布論」『オセアニアの物質文化・民族造形-通称今泉コレクションを中心に』2014年3月15日、南山大学

中門亮太「考古学と民族学」『早稲田文化芸術週間2013シンポジウム「四次元との対話-縄文と現代をつなぐもの-」』2013年10

月26日、早稲田大学小野記念講堂  
中門亮太「2011年度セピック川流域における民族考古学的調査報告-アベラム族の総合的調査-」『三大学合同シンポジウム ニューギニアの生活文化と神がみの形』2013年3月2日、天理ギャラリー

〔図書〕(計2件)

高橋龍三郎、中門亮太、大網信良、平原信崇 編 2014『縄文時後・晩期社会の研究-千葉県印西市師戸 戸ノ内貝塚発掘調査報告書-』早稲田大学文学学術院考古学コース

中門亮太 編 2013『戸ノ内貝塚発掘調査成果報告展-平成の印旛手賀-』早稲田大学會津八一記念博物館

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者 ( )

研究者番号：

(2)研究分担者 ( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：